



「はじめる」から「かなえる」へ。福島県では、震災から10年を機に「ふくしまからはじめよう」からのバトンを渡す、スローガン「ひとつ、ひとつ、実現する ふくしま」を策定しました。復興に向けて歩んできた「これまで」と、新しい未来に繋げていく「これから」と、県民のみなさんひとりひとりの「今」を重ねたメッセージです。

## 夏の企画展

# 「縄文 DX <sup>ほうしょうじり</sup> -会津・法正尻遺跡と交流の千年紀-

福島県立博物館

磐梯町・猪苗代町にまたがる法正尻遺跡は、県を代表する縄文時代中期の大規模なムラの跡です。この遺跡では、約1,000年間作り続けられた縄文土器が大量に出土しました。

ダイナミックな構図や立体的なデザインによるデラックス (DX) な土器。これらは福島県域を含む東北地方南部に広がる大木式土器<sup>だいぎ</sup>を主体としています。その他にも福島県地域は、隣接する北陸地方や関東地方との関わりから独自に変化した土器 [DX] もみられます。

「DX」すなわち「D(大木式土器のイニシャル)」に何かを掛け合わせた「X(ハイブリッド)」な土器のルーツや文化が交差するネットワークから、縄文ふくしまの特徴を見ていきます。

企画展に関する詳しい情報をホームページで公開しています。

福島県立博物館では、縄文土器に焦点を当てた企画展「縄文 DX」を開催しています。今回は、その見どころの一部を紹介しましょう。

### 国重要文化財「法正尻遺跡出土品」 指定15周年記念

まずは、国重要文化財指定15周年を迎えた法正尻遺跡の縄文土器です。縄文中期は豪華な文様が器面を飾るのが特徴です。

大木式土器は、縄文土器の名前の由来となった縄目文様を多用する伝統があります。器面に縄文を施し、その上に工具でなぞった線（沈線）や粘土ひもを貼り付けて盛り上げた線で、渦巻文様やS字文様を描くのが一般的です。特に口縁部の立



写真1 法正尻遺跡出土 火焰型土器（国重文）  
福島県教育委員会蔵

体的な把手<sup>とって</sup>は装飾性の高さや技術の高さが伺えます。

一方で、縄文を全く使わないスタイルの土器が、有名な<sup>かえん</sup>火焰型土器です。とさかのような形状の大きな突起がシンボルで、隆起した渦巻文様とそれに沿わせた丸みを帯びた線で器面全体を覆い尽くします。

法正尻遺跡をはじめ会津地域、本県中通り地方中部から栃木県北部には、火焰型土器にアレンジを加えて独自のスタイルにしたものや大木式土器と掛け合わせたハイブリッドなものが見られます(写真1)。このように、縄文時代における本県の土器は、北陸地方や関東地方と接する地理的な条件から他の地域の流儀を取り込んだものがよく見られることが特徴の一つです。

### スペシャルゲスト登場！ 国宝土偶「縄文の女神」

また、縄文時代中期は土偶の時代です。妊娠した女性をかたどったとされる土の人形が、土偶になります。県内でもこの時期から土偶の出土遺跡数が多くなり、土偶を使ったマツリが定着したものと考えられます。

8月20日(火)からは、国宝土偶「縄文の女神」が、法正尻遺跡出土品の国指定15周年を祝って山形県から駆け付けます。(それまでは複製品の展示をしています。)

この土偶は高さが45cmもある「日本最大の土偶」です(写真2)。

顔は半月形にデフォルメされていますが、上部の2つの孔が目のように見えます。両サイドにも穴が空き、耳か耳飾りのような表現になっています。

上半身は両腕を左右に伸ばしたひし形をしています。乳房に沿った線や体の中心の正中線以外に文様はなく、背中も背骨のラインのみが表現されいたってシンプルな作りです。

下半身は、へその部分が前に突き出し、お尻もまっすぐな背中のラインから急に後ろに張り出す



写真2 国宝 土偶「縄文の女神」  
山形県西ノ前遺跡

山形県立博物館蔵・写真提供

出尻形をしていて女性らしさを表しています。この腰回りに幾何学的な文様が集中しています。

脚部は末広りのベルボトムのような角柱形の2本の長い足がそびえ立つように伸びています。横線が幾重にも引かれていて縦長の脚部に落ち着きを与えています。

以上のように、この土偶は、体の部位ごとにくつつかの特徴がありますが、全体的にはシャープな印象を与え、まるで現代アートの様なたたずまいをみせています。その秘密は、体の各面が合わさる稜線にあります。エッジが効いた稜線が、足元から上半身の体側まで繋がっていて、土偶に一

体感とメリハリを加えています。表側の左右の稜線は途中で分かれ、へその部分で連結し、大事な腹部を強調する効果があります。

また、写真では見えませんが、お尻のラインの稜線は、エッジを強調せずに丸みをつけて整えるなど強弱のさじ加減が実に巧みです。

この「縄文の女神」は西ノ前タイプと呼ばれる土偶の頂点に立ちますが、類似の土偶は福島県内でも見られます。脚部のみの資料ですが、二本松市堂平遺跡どうだいらのものは大形品で、復元すると西ノ前遺跡に匹敵する大きさです。

### 縄文土器の最高傑作

#### しんぞうつつがたどき 神像筒形土器

この土器は高さが55cmもある大型品です（写真3）。最大の特徴は、あたかも「鎧」をまとったヒトが両腕を前に伸ばして土器に密着しているかのような立体的な造形です。

腕の先は丸く巻き込み、頭部は環状の粘土で顔面はなく、人間表現とは少しかけ離れています。首の付け根の部分は、人間でいう僧帽筋そうぼうきんが発達し、大きく盛り上がった肩と太い二の腕とをあわせて力強さを打ち出しています。

逆三角形の背中と首筋には、この時期の長野県ではまれな縄文（縄目文様）を転がしており、複雑な文様で覆われた器面の中でこの造形を際立たせています。

下半身は底部から帯状に伸び、蕨手状わらびでじょうに巻き込む文様になっています。

このような、人体のようで人間ではない文様は、神様がヒトの姿で現れる「化身」を表現していると考えられます。見事という言葉しか出てこないこの土器は、多くの縄文土器の中で最高傑作の一つと言えるでしょう。

今回ご紹介した出土品のほか、柳津町の土偶装飾付土器のように、福島県内には、土器と土偶を掛け合わせたハイブリッド土器が存在します。

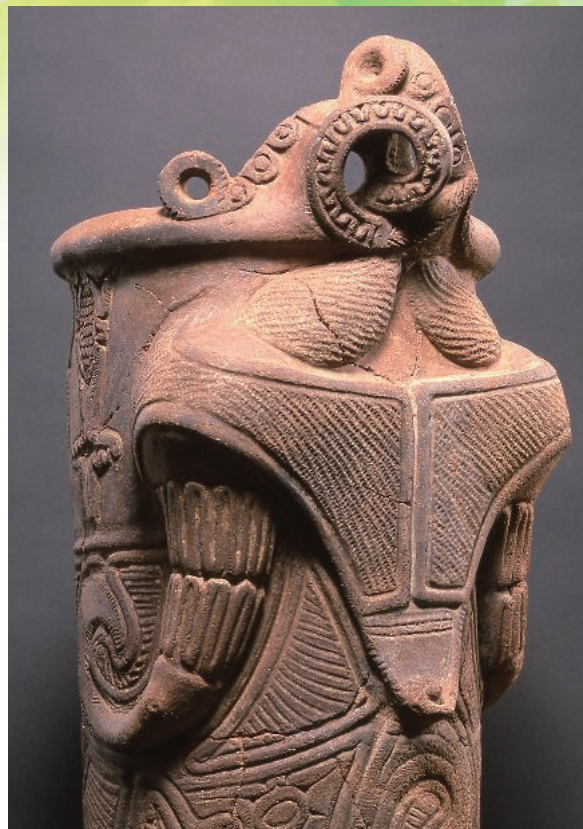


写真3 神像筒形土器（国重文）  
長野県藤内遺跡

富士見町井戸尻考古館蔵・写真提供

ぜひこの夏は、県立博物館からディープな縄文世界をのぞいてみませんか。

問い合わせ先 福島県立博物館

電話：0242（28）6000

会期：9月1日(日)まで

会場：企画展示室

企画展料金：一般・大学生 1,000円  
(20名以上の団体：800円)、  
高校生以下無料  
※企画展料金で常設展もご覧いただけます。

休館日：毎週月曜日(8月12日は開館)、  
8月13日(火)

開館時間：午前9時30分～午後5時  
(入場は午後4時30分まで)